

「葛飾柴又の文化的景観」 ニュース

受け継がれてきた柴又の伝統行事「神獅子舞」（その1）

10月4日（土）の夕方、柴又八幡神社の社務所から太鼓と笛の音とともに、子ども達の元気な声が聞こえてきました。例大祭で奉納される神獅子舞の稽古初日。1週間にわたる練習と本番を密着取材させていただきました。

◆**神獅子舞とは** 八幡神社例大祭で奉納される神獅子舞は区指定無形民俗文化財。黒い鳥の羽がついた獅子頭を大きく揺らし、雄々しく舞う3匹の獅子（大獅子・中獅子・子獅子）は神の化身。これを舞うことは大変名誉なことで、昔は柴又に住む長男だけに許されていました。今では柴又以外の子ども達も参加しています。

神獅子には不思議な伝承があります。3匹の獅子頭は柴又村の名主・齊藤家の家宝として、代々、蔵の中で大切に保管されていました。ある時、日に日に蔵の米が減っていき、獅子頭が米を食べているに違いないと怒った名主は、獅子頭を江戸川に流してしまいます。しかし、何度流しても川を遡って戻ってきました。柴又の人々は大いに驚き、鎮守八幡神社に奉納することにしました。獅子頭は火災の時にも焼失を免れ、今に伝えられてきました。その霊験を尊び、祭礼で奉納されるようになったそうです。

◆**令和7年度八幡神社例大祭前日（宵宮）から当日** 10月11日（土）、小雨の中での宵宮。翌日の例大祭に向け、準備が行われました。社殿の中で大きな長持から三匹の獅子を出し、獅子頭の角と耳を取り付けます。長時間にわたる演目に耐えられるよう何度も確認しながら紐で固定します①。また、太鼓の響きを良くするために革を張り直し、子ども達が持つ花（万灯）を製作します。社殿の外では、竹を切り出して舞の演目で使用する弓、矢、御幣などの道具を製作します。特に弓は作るのが難しく、折れないように竹をしならせて弦を張ります②。社殿前に設置された舞いの舞台に幕が張られ、当日の用意が整いました。

境内では子ども神輿の準備が同時に行われました。昨年度から例大祭の陰の年にも子ども神輿が出されることになり、神輿を担ぐ棒を固定しました。

例大祭当日、舞の舞台に世話役、総代の方々が集まり、神様を呼ぶ儀式が執り行われました③。次いで、社殿の中で神事が行われ、その間に猿田彦に先導された三匹獅子が笛の音とともに社殿を3周しました④。神事が行われている社殿に悪いものが入らぬように周囲を守るという意味が込められています。神事が終わると午前11時過ぎから舞が始まりました。重い獅子頭を被りながらの舞は見て

いる私達にもその難しさと緊張感が伝わってきます⑤。舞い手の皆さんは獅子頭を激しく揺らしながら見事に舞い、見学していた外国人観光客もその迫力に見入っていました。13時から子ども神輿が始まり、子ども達の威勢の良い掛け声のもと、柴又のまちを練り歩きました⑥。例大祭の最後を飾る「太刀の舞」が終わったのは午後8時過ぎ。9つの庭を演じ切った舞い手の方々には、惜しみない拍手がおくられました。



昭和30年代の神獅子舞（個人蔵）



① 獅子頭の準備



② 熟練を要する弓の製作



③ 神獅子舞前の儀式



④ 獅子を先導する猿田彦



⑥ 子ども神輿



⑤ 神獅子舞

◆**神獅子舞の演目** 舞の演目は「庭」と呼ばれ、全部で9つの庭（献饌の舞・飛び活鼓・笛がかり・花がかり・花廻り活鼓・弓がかり・返り活鼓・綱がかり・太刀の舞）から構成されます。それぞれに物語があり、「綱がかり」は、障害物である綱を乗り越えて、親子3匹が再び一緒になります。勤労の舞とも云い、親子が力を合わせて困難に打ち勝ち、常に勤労に励む姿を現した舞とされています。誰がどの演目を演じるかは、お師匠さんと呼ばれる経験者の方々が、これまでの経験や本人希望などを考慮して決定します(7)。中でも、護国豊穰、家内安全、祖先崇拝、悪魔撲滅を祈り、平和と幸せを願ったその年の舞納め「太刀の舞」の大獅子は格別に名誉な役です。この役は全ての舞を経験していないとできないそうで、これをできるようになるには30年はかかるそうです。神獅子の舞い手は、厳しい練習を経て、子獅子から中獅子、大獅子へと成長していきます。決して上手・下手だけで評価するものではなく、一生懸命に取り組む姿勢や気持ちの強さが大事だとお話いただきました。

◆**神獅子舞の練習風景** 神獅子の練習は、宵宮(例大祭前日)から数えて1週間毎日行われます。土日の練習は午後4時～8時半頃まで、平日の練習は午後7時～10時頃まで行われます。昔はもっと遅くまで練習していたそうです。子ども達も同じ時間練習します。始まる前はリラックスしている子ども達も練習が始まると真剣な表情で太鼓に向き合います(8)。舞の練習は、大獅子・中獅子・子獅子が揃ってから始まるため、それまでは子ども達を中心とした太鼓の練習です。今年練習に参加している子ども達の中で最年少は小学1年生ですが、彼らはまだ舞を舞うことはできません。重い獅子頭を付けて長時間舞うので、舞えるようになるのは小学3年生からです。今年の舞い手の最年長は49歳。引退は50歳と決まっています。

舞の所作などについての文字資料はなく、全て口伝で継承されてきました。そのため、練習はお師匠さん達が指導をしながら進められます(9)。良い獅子舞は羽が揺れ、実際よりも大きく見えるそうです。ベテランのお師匠さんが動きを見せ、舞い手はそれを見て聞いて真似て、覚えていきます。最も多くの指導が入るのは、やはりどの演目も大獅子で、その難しさがひしひしと伝わってきます(10)。大獅子に対して「動きが速すぎる」「もっと堂々として」「がんばれ」と声が飛び、特に、納めの舞である「太刀の舞」の時は、指導の熱気が最高潮に達し、周りで見学している私達も息を飲んで見守りました。

練習の時の楽しみは食事の時間。世話人の方々が1週間分のメニューを考え、買い出しと調理を担います(11)。地元の農家さんが作った野菜が入ったお味噌汁は絶品。練習でお腹をすかせた子ども達は、お味噌汁やおにぎりをおかわりして、美味しそうに食べていました。練習中は大人も子どもも真剣そのものですが、食事中はリラックスした表情で楽しく語り合います。神獅子舞は、世代を超えた交流の場となり、地域の絆を育む場となっています。

◆**次世代の育成に向けて** 口伝で継承されてきた神獅子舞ですが、最近では、若手有志で映像記録をしているそうです。最初は自分達の舞を後から確認するために撮影していましたが、DVDにして配布したり、YouTubeにアップして、家でも練習できるようにしているそうです。また、例大祭前の練習以外にも、月に1回集まって練習するという取組を昨年からはじめたそうで、少しずつそれらの成果が現れてきているとのことでした。



⑦ 舞い手の決定



⑧ 子ども達の太鼓の練習



⑨ お師匠さんによる動きの指導



⑩ 舞の練習風景



⑪ 食事の用意をする世話人の方々

【取材後記】 舞い手、お師匠さん、子ども達、世話人の方々、そして、地域の方々など、神獅子舞に関わるたくさんの方々本当に神獅子舞のことを大切にされ、愛し、強い思いをもって継承に取り組まれていることを肌で感じることができました。同時に、「葛飾柴又の文化的景観」が長い歴史の中で紡がれてきたものであり、それを繋いできた伝統と地域の方々の思いや絆を垣間見させていただきました。「神獅子舞」という柴又の伝統文化の根底に流れる受け継いできた思いや価値を教えていただいた関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。次回、「受け継がれてきた柴又の伝統行事「神獅子舞」(その2)」では、関係者の方々からお伺いしたお話をご紹介します。

「柴又ラムネ」を作り続けて 大越飲料商会 大越 恒男 氏

私は高校卒業後に茨城から上京して、知り合いが勤める深川永代にあるラムネ屋で住み込みで修行を始めました。朝8時から、夜は仕事が終わるまで働き、雨の日以外は休みがありませんでした。最初は先輩が車で営業に出かける中、ラムネの瓶を専用ブラシで1本1本洗っていました。住み込みなので食事は無料でしたが、夜に空腹で当時10円だったコッパンを買いに行ったことが思い出です。約10年の修行後、独立して昭和36年に柴又に来ました。当時の柴又は家の周りが田んぼと畑ばかりでカエルの声が聞こえてきた記憶があります。

柴又で独立してしばらくは、当時流行りの袋ジュースやかき氷のシロップを製造し、庚申の日に帝釈天参道でかき氷を売っていたこともありましたが、ラムネ製造を始めた際、商品名を「柴又ラムネ」と「寅さんラムネ」で迷いましたが、私の働いていたお店が深川永代橋のそばにあり、その地名を冠した「永代ラムネ」を商品名にしていたので、「柴又ラムネ」にしました。ラムネは駄菓子屋さんに卸していましたが、駄菓子屋さんの数が減ってしまい、現在では参道の店舗に卸しているほか、土日に参道でラムネを売ることもあります。ラムネのほかに、炭酸やメロンソーダ水を製造しています。

ラムネ作りのこだわりは原料となる水です。水道水をそのまま使うのではなく、漉してカルキ等を抜きます。また、炭酸を作る際には冷水の方が炭酸ガスと混ざりやすいのですが、夏は水温が上がり、25度から30度位になってしまうので、5度位に冷やす工夫をしています。ラムネの味付けには甘味料と香料を用います。しかし、原価が上がり、仕入れ値が倍になってしまいました。ラムネ製造を始めた昭和の頃と現在では様々な変化がありました。一番変わったのは機械です。昔は、瓶にラムネを一本ずつ詰め、飲み終わった瓶は手作業で洗浄していました。今では全自動になりました。ラムネを入れる容器も、製造を始めた当初はオールガラス瓶が主流でした。洗浄して使い続けていますが、生産する工場がなくなり、300本しか残っていません。プラスチックのキャップの付いたガラス瓶に変わり、今では容器自体もプラスチック製になり、スーパーやコンビニで販売されるようになりました。ラムネ屋の数も減ってしまいました。独立した頃は同年代の仲間と「盛和会」を結成して活動していましたが、今では私以外、みんな廃業してしまいました。私も来年で90歳になりますが、息子が後を継いでくれます。これから先も続けられるだけ柴又ラムネを製造したいです。



工場で説明をする大越恒男氏



ガラス製ラムネ瓶(右から2番目はオールガラス製)

農業を基盤に発展してきた柴又は、大正から昭和にかけて、京成線柴又駅の開業、帝釈天題経寺の門前町の形成、金町浄水場竣工など、現在に続く都市としての顔つきを整えてきました。そんな中で、飲料の製造業として大越飲料商会が開業しました。ガラス玉が瓶にぶつかって「カラカラ」と音を立てる、昔懐かしい昭和の情緒あふれる清涼飲料水「ラムネ」。お祭りの時に買ってもらったなど、思い出の多い飲み物という方も多いのではないのでしょうか。

昭和の子どもたちの遊び 茗荷屋 永井 武久 氏

子どもの頃は参道やハイカラ横丁さんの後ろに駄菓子屋さんがあり、柴又の子達の社交場でした。紙芝居も来ました。釘倒し(板に長い釘を投げて立たせ、相手の釘を倒す。倒した釘はもらった。最後に釘を多く持っている人が勝ち)やベーゴマ(駄菓子屋さんで購入。渦巻き、星、桜、相撲の横綱や野球選手の絵柄があった。相手の駒にぶつけることをガチャギといい、裏返しにしたり盤から弾き出すと勝ち。相手のベーゴマをもらった。)、星の一筆書き(地面に星を描いて、中に置かれたビー玉を狙ってガン玉という鉄の玉を転がして弾き出す遊び。1回で弾き出せる数を勝負)をしました。遊びにはルールがあり、守らないと怒られます。遊びの場は社会に出る準備になっていました。学年関係なく遊んでいて、ガキ大将がグループを仕切っていました。喧嘩しても一定のところでガキ大将が「もうやめよう」と止めました。女の子は、ケンケンパ(口ウセキで地面に丸を描き、「ケンケンパ」と言いながら片足でジャンプする遊び)や石蹴り(地面に引いた線と蹴った石の近さを競う遊び)をしていました。中学生になると自転車で遠出しました。スポーツ自転車は買ってもらえず、家の実用自転車東京タワーや船橋まで行きました。東京タワーは中学生の頃に完成し、江戸川から見る事ができました。

遊びの場所は、家の裏や二天門前の公衆トイレの所(広場になっていた)、江戸川にもダボハゼを釣りに行きました。釣りの餌は農家さんの畑でミズを捕っていました。



永井武久氏

夏は金町浄水場の南側の道が水路になっていて、水が結構流れ出ていたので、そこで泳ぎました。木でゴムのスクリーをつけた船を作り、走らせたりもしました。小学校高学年や中学生になると江戸川で泳ぎました。矢切の渡しの少し下流の辺りは引き潮になると島が出てきます。島の両サイドは深い水路になっていて上り下りの船が通る船道でした。船は救難用の小船を引っ張っていたので、船員さんから怒られました。近づいてその小船につかまるのが私達の度胸試しでした。モクゾウガニやベンケイガニも捕まえていました。

高校生位から、土日に両親がお店をやっているを手伝うようになりました。昔は庚申の日や正月はすごい人出がありました。お正月と庚申で生活できた位です。その頃の川甚さん、川千家さん、兎びす家さん、そして川千家さんと川甚さんの間にあった中川さんは、割烹旅館で、宵庚申の日は浴衣を着た宿泊客が参道を歩いていました。寅さんが始まった頃から信仰の街から徐々に観光の街に変わりました。4、50年前に柴又のまちなみを残すルールを作ろうということになりました。最初は「縛りがあると土地の価値がどうなるんだ」「規制があると融資を受けられない」と随分揉めました。最初は反対の方が多かったです。寅さん効果で人がたくさん来たから「お店を大きくしたい」と思ったけれど、「そんなに大きくしなくてもいいんじゃない」というように少しずつなっていました。



ベーゴマ遊びを教える永井氏



永井氏が昔遊んだ場所(地図は現在のもの)※今は江戸川や用水路で遊ばないで下さい。

終戦1年前の昭和19年に生まれ、柴又で育った重要な構成要素「茗荷屋」の店主である同氏に昭和の素朴な遊びと、こうした子どもの世界で得られた様々な教訓などをお話いただきました。終戦から高度経済成長期にかけての柴又の風景、変わってきたものと変えないための柴又の人々の努力をお聞かせくださいました。

柴又宵フェスタ・宵縁日が開催されました

庚申信仰の流行によって江戸時代後期から昭和初期にかけて、宵庚申(よいこうしん)の日(60日ごとに訪れる庚申の日の前日)には江戸・東京から多くの参詣客が柴又を訪れました。かつての宵庚申を想起させる本イベントが10月24日(金)・25日(土)に開催され、小雨まじりの中、多くの方に来場いただき、柴又の風情とともに串グルメや音楽などをお楽しみいただきました。



ご注意ください

「葛飾柴又の文化的景観」の選定範囲内で工事等を行う際、協議や届出等が必要な場合があります。

- **柴又まちなみ景観ガイドライン** (特定非営利活動法人柴又まちなみ協議会)
柴又6丁目の一部・7丁目の一部において建築・改修等工事を行う場合
- **葛飾区景観地区条例等** (葛飾区都市計画課)
柴又地域景観地区内で建築物や工作物の新築、新設、外観の変更等を行う場合
- **重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規則** (葛飾区生涯学習課)
重要な構成要素がき損した場合や工事等を行う場合



「文化的景観ニュース」のバックナンバーのほか、「葛飾柴又の文化的景観整備計画」や「文化的景観パンフレット」を、上記の二次元バーコードよりご覧いただけます。

【お問合せはコチラ】 葛飾区教育委員会事務局生涯学習課文化的景観係

〒124-8555 葛飾区立石5-13-1 TEL 03-5654-8477 FAX 03-5698-1541